

会 議 録

会議名(付属機関等名)	川西市青少年問題協議会 専門委員会		
事務局(担当課)	こども部 こども家庭室 こども・若者政策課		
開催日時	平成24年10月23日(月) 15時～17時30分		
開催場所	川西市保健センター 2階 健康教育室		
出席者	委員	岡本委員 玉木委員 川中委員	
	その他	【意見交換会 参加団体】 ・特定非営利活動法人 阪神NPOセンター ・北陵コミュニティ 青少年育成推進委員会 ・阪神北青少年本部 ・川西市久代児童センター ・国津商事株式会社 ・特定非営利活動法人こうべユースネット ・兵庫県立猪名川高等学校	
	事務局	こども部長 中塚 一司 こども家庭室長 山元 昇 こども・若者政策課 課長 金淵 信一郎 主査 鳥越 永都子 主任 大島 弘章	
傍聴の可否	可	傍聴者数	無
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1. 開会 2. 川西市青少年問題協議会 専門委員会委員長あいさつ 3. 川西市青少年問題協議会 専門委員自己紹介 4. 意見交換会について 5. その他 6. 閉会		
会議結果	別紙「審議経過」のとおり		

審 議 経 過

1. 開会 (15:00)

2. 川西市青少年問題協議会専門委員会委員長あいさつ

委員長よりあいさつ

3. 川西市青少年問題協議会 専門委員自己紹介

各委員のあいさつ

事務局のあいさつ

4. 意見交換会について

【委員長】

この委員会の録音についてですけれども、会議録を正確かつ迅速に作成するために、録音をさせていただきます。その後、会議公開運営要綱に基づいて、会議録を作成し後日公開しますのでよろしくお願ひします。

では、さっそく意見交換会を行います。お配りしている名簿の順に、お話を伺いたと思います。既にご記入いただいたアンケートを基に各団体の事業の課題、川西市へのご意見、健やかな若者の育成に対するご意見を5分間程で説明をお願いします。その後、専門委員からの質問の時間を設けますのでお答えください。全ての団体様のお話が終わりましたら、最後に各団体様同士の質問や意見交換をする時間を設けておりますので、よろしくお願ひします。本日いただいたご意見は、できる限り素案に反映させていくつもりですが、結果として全てを反映できない部分もあるかと思ひます、ご了承ください。

名簿の順に、特定非営利活動法人阪神NPOセンター様からよろしくお願ひいたします。

【阪神NPOセンター】

アンケート用紙をご覧ください。

私達が若者事業として手掛けているのが、指定管理を受けて運営している伊丹市立市民まちづくりプラザ事業の中で行っている若者事業、阪神NPOセンターとして行っている自主事業、兵庫県の青少年本部の方から委託を受けているゆうゆう広場中間支援機能助成事業、この三つを行っております。

まず、まちづくりプラザ事業から始まっていくのですが、本来行政の組織構造からいうと、まちづくりプラザの場所は若者事業をする場所ではないのが常識ですが、私達が手掛けるようになって若者が来ない場所だなというのが最初の印象でした。それを打開したいということで始めたのが、多世代交流と

次世代育成をキーワードとしたたみまるカフェです。参考にさせてもらったのが、川西の市民事務局かわにしをつながりカフェというところで、8回くらい行きました。

世代を広げて行っていこうと、H21年の4月からたみまるカフェが始まり、その中でだんだん若者がまちづくりプラザに集まってくるような環境が少しずつできつつありました。そこに至るまでには、市立伊丹高校の先生方との連携がありました。伊丹高校でSNSをしている若者とのつながりができました。そういう状態の時に兵庫県の青少年課、公益財団法人青少年本部から声をかけていただき、若者を雇える環境ができ、その時に、一気に若者事業が花開いていきました。

まず、子どもの遊び場・若者の居場所づくり活動支援強化事業をいただいた関係で、リータの冬フェス、夏フェス事業が立ち上がりました。公益財団法人青少年本部の若者ゆうゆう広場事業から自主事業としての若者ゆうゆう広場事業が始まりました。ただ、伊丹市としては、我々に委託している事業の中に若者事業は入っていないという認識がありました。

若者ゆうゆう広場事業の委託事業は3カ月で終わったので、その後はNPOの自主事業としてまちづくりプラザの場を借りて行っています。非常にたくさんの若者が集まってくれたので、そこからリータの冬フェス、夏フェスといった事業も県の手を離れて、我々の力だけで実施できるようになりました。伊丹市の方でも、まちづくりにおける次世代育成、多世代交流の重要性は認識していたので、まちづくりプラザ事業の中の委託事業とは別に自主事業をするという道を開いてくれました。これは市の予算は使えないのですが、まちづくりプラザ名義の事業として、現在ではまちづくりプラザの自主事業として、若者ゆうゆう広場事業、リータの冬フェス、夏フェス事業を行っています。

また、県の事業とは関係なく、元々伊丹市立東中学校で市民や学生のボランティアが入って子どもに勉強を教えていたことを、今年からPTAさんと連携して伊丹学生交流センターということを始めました。これを始めた理由は、今までは学校の組織の中で東中学校しかできていないこのサポートを市全域に広めたいという思いがあって、我々が事務局をして、縦割りの限界を超えて他へ広げていく形の取り組みです。これは一定の成功を収め始めており、地域のセンターを使って、初めて学習支援の取組を始めることになりました。

NPOの自主事業としては、神戸のフリースクールと連携して今年から伊丹でひきこもりや不登校を考える会をしています。ここには、今までひきこもっていた青年であるとか、不登校の子どもを抱えた保護者の方も来られて、とにかくディスカッションで気分的に楽になろうという目的で行っています。ここからひきこもっていた青年が立ち上がって、ITに詳しいからエクセルくらいは教えられるということで、先日エクセルの講座をまちづくりプラザで行いました。講座は全4回、一回2千円で、高齢の方は、パソコンが苦手な方が多いんですが、ひきこもっていた人は心の痛みが分かる所もあり、非常に丁寧に教えてくれて、高齢の方にとっても好評でした。

それとは別にひきこもっていた若者はITに強い子が少なくないので、その若者の能力を生かしたいと思い、今考えているのは、ITの集団育成事業を就労支援につなげる試みを考えています。例えば、

地域活性化のためのスマホのアプリの仕事を取ってきて、彼らに任す仕組みづくりを始めようとしています。来年1月からスマホのアプリの講座をしようと思っています。彼らの中から十分に度量もある2人をいたみホールで行うNPOマネジメントスクールに参加してもらいます。こういうことがどんどん発展したらいいなと思います。

ゆうゆう広場とリータの冬フェス、夏フェスについて若者事業の担当者からお話します。

では、ゆうゆうたまり場についてお話します。2011年に伊丹市立市民まちづくりプラザに誕生した中高生のいこいの場です。若者が学校帰りに気軽に立ち寄っておしゃべりを楽しむたまり場活動をベースに、音楽や創作といったサークル活動、ボランティア活動、自分達がやりたいことを思いきりのびのび取り組むことができるのがゆうゆうたまり場です。毎週金曜日に17時から20時まで開設し、1回につき20人程度の若者が集まり、自由に過ごしています。最初はただ集まっているだけで、私が何か企画したら参加するだけだったのですが、最近は、自分達から何かこういうことをしたいと企画書を出してくれたり、私が何か企画する時もお手伝いしたいと実行委員のメンバーに入って参加してくれることが多くなってきました。

その大きな例として、リータの夏フェス、冬フェスというのがあります。最初の夏フェスは細部はほとんど私一人が準備していたのですが、最初は当日ボランティアでお手伝いだった若者が、次は実行委員になって企画の段階から参加したいと言う若者が増えるようになりました。また、実行委員会も月に1回定期的にしたいと言った意見も出て、どんどん積極的に参加してくれる若者が増えるようになりました。夏フェス、冬フェスというのはどういうものかというと、ゆうゆうたまり場にくる有志の若者で構成された実行委員メンバーで企画、運営しているお祭りで、地域と若者を繋ぐことを目的にしています。会場は阪急伊丹駅4階と伊丹市立市民まちづくりプラザです。だいたい1回に30団体程集まって、ブース出展をしたり、ステージに出演したりします。一番の目玉は実行委員のステージ企画があり、今まではゆかたコンテストやプレゼンの対決などを行いました。コンテストの商品として、駅ビルの商店から協賛いただいた商品を若者が集めて来て、参加してくれた市民の皆様にプレゼントしています。このイベントを機にゆうたまに参加する若者が増えたなと感じています。

ただ、場所を用意するだけではなく、参加する若者にとって、何かできる場所の必要性を常々感じています。以上で夏フェス、冬フェスの説明を終わります。

今、説明した担当者は、県の事業で採用したのですが、大概、行政の仕事の緊急雇用は1年雇用ですが、我々は緊急雇用が終わっても雇用しました。これが一番大事だと思います。1年だけだと何もできない。そこからスタートして、積み重ねていくわけなので、事業を受けるNPO側が、努力をして優秀な若者をどんどん採用できるような素地を作っていけないといけないと思います。

【委員長】

若者が集まってくるというのは非常に興味深いのですが、そのきっかけとなった市立伊丹高校の先生とSNSについて具体的に話してもらえますか。

【阪神NPOセンター】

元々まちづくりプラザには若い人は全く来ませんでした。知り合いになった市立伊丹高校の先生も、まちづくりプラザを活性化したいと思われていて、そのためにSNSを利用できるようになりました。SNSを通じて高校生と意思疎通ができ、先生方もまちづくりプラザに行ったらと高校生に勧めてくれて、高校生が普通にまちづくりプラザに来るような状態ができ、そこにたみまるカフェという多世代で話す場所ができたことが素地になったと思います。

いたまちSNSというんですが、元々伊丹高校が校内用に作ったSNSですが、外部の市民にも開放しており、招待制でそのメンバーになることができます。顔の見える関係でコミュニケーションを楽しむSNSです。商店街の方、保護者の方、我々のような公共施設の者もあり、現在2千人位の参加者がいます。主な使われ方は、先生方と生徒の授業上のコミュニケーションが主ですが、それ以外に、外部公開、全体公開はみんなの目に触れるので、私は3年間で300回以上ブログを書いて、まちづくりプラザを若者に知ってもらえるように努力をしました。伊丹高校以外の子では、SNSが起点となり、その友達や中学の同級生がロコミでどんどんまちづくりプラザに来るようになりました。

課題としては、若干、固定化されてきたので、そこをどういう風に変えていくか、次の仕組みづくりが求められていると思います。

【委員】

事実的なことを聞きたいのですが、そこに集まっている若者は、何を求めて、期待して集まっているのですか。

【阪神NPOセンター】

新しい友達を求めていると思います。中高生の子が大学生のお兄さん、お姉さんと話して、とても楽しそうにしています。学校ではあまり話さないけど、ここに来たら話すといった子もいます。

【委員】

リータで友達と繋がって何かしよう、という活動ですが、この取組を若者がまちづくりとどのように結びつけて理解しているのかが気になります。どのように意識を向けているのでしょうか。

【阪神NPOセンター】

まちづくりとか難しいことは考えず、友達と話せて楽しいんだと思います。ただ、異年齢の方、地域の商店の方等、いろいろな人達と出会うことで、クラスの友達とは違う魅力を感じていて、これがまちづくりに繋がっているといつか気付くのではないかと思います。

運営者側から言わせてもらおうと、そこで効果を求めてはいけないなど。私達大人がすることは、そこで石を投げ込むこと、違う出会いを作ってあげること、そこで何を感じて行動するかは若者が自由に考えてもらうことが大切だと思います。

【委員】

この取組の評価をしようという意図ではなくて、気になっていることを聞いています。多分、何のた

めにするのかという問いかけもあって、こう考えてないの？という風に思考を刺激するというのもあると思って、事実を知りたいと思ってお聞きしました。

特に市立伊丹高校は、商店街の活性化を授業として取り組んでいて、学校の中でまちづくり、商店街活性化をステップアップとして位置づけられているのかなど。そういった学校の取り組みとのつながりはありますか。

【阪神NPOセンター】

ゆるい連携はありますが、役割分担はありません。ただ商店街の人達が、例えば商店が倒産してしまった時に、その商店の人をまちづくりプラザで面倒を見て、と言われることはあります。

【委員】

若者が、こういう経験をして力がついたな、ということは何でしょうか。

【阪神NPOセンター】

夏フェス、冬フェスで、お店に行って商品をいただくお願いをすることで、内向的だった子が人とうまく話せるようになってきたということがありました。その子も今は次の後輩を連れて、お店の回り方とかを指導できるように成長しました。

【委員】

その子にとっては、とても大きい意味を持っていますね。

【委員長】

では、次の北陵コミュニティさん、お願いします。

【北陵コミュニティ】

今日は北陵コミュニティを代表して来ております。北陵子ども大学というのは、放課後子ども教室の北陵地区のネーミングを北陵子ども大学と称し、北陵コミュニティの青少年育成推進委員会が事務局をしています。

対象は地域の小学生600人程です。小学校を經由したチラシなどで告知し、その都度子どもを集めて色々な教室を実施しています。費用は放課後こども教室と、川西市のジョイフルフレンドクラブの補助金を利用して運営しています。

青少年育成推進委員会は、地域の自治会から5人、PTAから5人が入り、私を含めて11人で構成し、そのメンバーで活動しています。以前は、夏休みの自然学校で1泊2日で子どもを連れて行くツアーと、年末に地域のお年寄りを呼んでしめ縄づくりを教えてもらうという二つがメインの事業でした。

私が、5年程前からこの事業に携わり、放課後子ども教室と一緒にすることになって、色々な行事を行っています。

主な教室としては、茶道協会の元会長であった方の発案で、子どもに伝統文化を継承させたい、一緒にしたいということで、お茶たて体験教室というネーミングで、子どもを1回10人程集めて、いわゆる茶道教室を行っています。普段はじっと座れない子どもが、90分間たてば座っています。先生が見事だ

と思います。いろいろな細かいことも教え、立ったり座ったりしながら最後はきちんと座れるようになります。子どもは、座っておいしそうにおまんじゅうを食べ、甘いものを食べた後は、濃い抹茶も飲むことができます。先生の仕掛けに驚かされます。

総じて言えることは、いつもどこかと一緒に、協働ということを考えています。そして子どもに体験してもらうことをコンセプトに、北陵こども大学はいろいろな教室を行っていることが特徴です。色々なことで先生の教えに感心させられます。

他に、おはし名人大会というのは、東谷中学校区の青少年育成市民会議という団体の企画で、私達の北陵小学校区、牧の台小学校区、東谷小学校区でそれぞれ豆をおはしでつまむ大会を各地区で行い、そのチャンピオンを決める大会を東谷中学校区で行います。

あとは、北陵高校の自然科学部の高校生に来てもらって、子どもに科学実験教室をしてもらいます。

スポンサーですが、大阪スローフード協会と繋がっています。川西市は、給食は完全米飯ですが、朝食もやはりご飯を食べて行かせたいという思いが私達の中にあり、そのために、子どもに漬物を漬けることを教えようということになりました。自分で漬けたら、その翌朝はお漬物とご飯を食べて出て行くのではないかと大阪スローフード協会さんと話し合っ、朝ご飯プロジェクトお漬物教室を開催し、お母さんと子どもでお漬物を漬けて、お漬物の文化を広めようという動きをしています。

他に地域のボランティアさんによる、縫い物教室、男の子でも自分でボタンつけくらいはできるようにしようという発想から、地域の高齢者の方の意見を取り入れた教室があります。

また、夏休み、冬休みに自習教室を開いています。夏休みの場合は、節電のため家ではクーラーをつけずに、公民館のコミュニティ室でクーラーをつけて、地域の大学生もボランティアで呼んで、子どもが夏休みの宿題をするという教室で、1週間で延べ100人位の参加がありました。今年はお母さんやおばあさんも部屋で読書をしてください、ということで人を集めて自習教室を開きました。

しめ縄づくり教室は、地域の方で教えてくれる方がおり、そのネットワークでしめ縄づくりを毎年恒例行事で行っています。

多目的グラウンド開放しちゃうぜえ〜という教室は、数年前から北陵地区に多目的グラウンドがあり、近所の公園ではボール遊びはできないので、地域で多目的グラウンドを自由に遊べるように開放して、北陵こども大学の主催で、毎回30人から50人程の子どもが勝手に遊んでいるという状況です。ここに老人会が関わり、いわゆる三世代交流がある中で、いろいろなおもしろいことが始まりそうな状況です。

コミュニティの役員の方の発案で、凧を作って凧揚げをしたりもしています。

今年、スポーツ21に北陵こども大学の看板を貸して、スキー教室を開催します。

北陵こども大学という名前の看板を地域の団体が上手く利用してもらって、子どもが集まる体験教室を開いてもらったということ、そのようになりつつあります。地域の広報や学校のPTAの広報が北陵こども大学を取り上げて、今年の夏以降に記事にしてくれました。

基本的には、子どもの居場所づくりということで放課後こども教室が始まったんですが、子どもの夢

に繋げていきたい、色々なことを体験させてあげたいというのが基本的な考えにあり、自前の人だけでなく、きちんと教えてくれる人を探し連れて来て、一緒になって教室を運営してもらうことが意義ある形に繋がるという考え方で行っています。

問題点は、中心になっている人だけで動くことになってしまうことです。自治会から出てくれる人、PTAから出てくれる人は、子どもが小さいことや、習い事をしているからとなかなか時間をとってもらえないので、だからこそ、先程話したやり方を進めるのがいいのではないかと考えています。

【委員長】

それ以上の年齢の若者について、居場所的な活動に参加してもらえたらと考えられていますか。

【北陵コミュニティ】

今は、小学生が中心ですが、本来は中学生、高校生もサポートしたいのですが、やはりクラブ活動などで忙しく参加できないのが実情で、募集をしても参加してくれないのが現実です。

中学生、高校生、それ以上の年の若者まで地域としてみていくなれば、何らかの組織が必要です。例えばお祭りをするならば、小学生、中学生、高校生、それ以上の年齢の若者の組織、などは田舎ではありますよね。青年団とか。そのような縦の組織化がないと人は出てきません。田舎の祭礼で、お稚児さんが出るとお母さん達も手伝うので、そのようなことで地域に子どもがデビューすると自分も手伝うなどの形態があり、私たちも田舎の仕組みを勉強して、子どもや中高生の組織づくりをしていけば、ひきこもらない世界ができていくのかなと思います。

【委員長】

小学校でできた、地域で結びついた組織が中学生になるとほどけていくような感じでしょうか。

【北陵コミュニティ】

ほどけはしませんが、中学生になるとクラブ活動などで別々になり、それを束ねるものがないことが問題だと思います。

【委員】

北陵子ども大学という名称で始まったのは、いつ頃からですか。

【北陵コミュニティ】

去年から北陵子ども大学というこのネーミングになりました。

【委員】

いろんな連携をされて事業を展開されていますが、主な教室の運営は中心になっている方がされているんですか。

【北陵コミュニティ】

そうです。

【委員】

引き継ぎなどがあると思いますが、組織の維持の方法について、どの辺を考慮されていますか。

【北陵コミュニティ】

私とコミュニティの中心になられている方で行っています。組織として生みだしてはいませんが、これを残していけば今後繋がっていくものになっていくと思うので、今は実践しています。

【委員】

村の祭礼は、子どもにも仕事がありますよね。北陵子ども大学では子どもはお手伝いの役割がありますか。

【北陵コミュニティ】

自分のことは自分でしようということで、自習教室でも机とイスを用意する、その場を作るところから始めています。

【委員】

いろいろな所と協働されていますが、今後こんな所と協働したいけど見つからないなど、困っていることがありますか。

【北陵コミュニティ】

やりたいことはたくさんあるので、早く実行したいです。

【委員長】

次は、阪神北青少年本部さん、お願いします。

【阪神北青少年本部】

資料に基づいて、阪神北青少年本部の組織、体制についてですが、心身ともに健全な青少年の育成を図るということで昭和43年4月1日に任意団体として発足しました。平成21年4月1日に公益財団法人兵庫県青少年本部となりました。神戸に本部があり、各地域ごとに9つの地方本部があります。県には、10県民局があり、神戸県民局を除いた9つの県民局に地方本部を置いており、阪神北県民局には阪神北青少年本部を置いて事業を行っています。

アンケート用紙の3に記載しているとおおり、定款記載事項は1から6までです。

事業としては、県の本部が9つの県民局で一律に行っている兵庫県青少年本部事業と、活動経費は賛助会費により、各地方本部ごとに特殊な事業を行う地方本部事業の2種類の事業があります。

次ページですが、全県的に行っている事業は、県の本部から地方本部に資金が来て行っている事業です。1番目は阪神NPOセンターさんから説明があった若者ゆうゆう広場事業、2番目が子どもの冒険ひろばの推進ということで、身近な地域の大人が見守る中でプレイリーダーの人がおり、子どもが安心して自由に遊べる場として県下で30カ所にあり、この阪神北地域には3カ所に設置されています。

3番目が青少年交流サロンで、20代、30代の若者が活動の企画・運営を自主的に行い、地域のイベントへの参加を通じて仲間づくりを行い、地域とのつながりや社会への参加意識を高めるための活動を支援し、県民局の会議室で会合するために集まっています。

4番目は、少年の主張「中学生のメッセージ」で、県内在学、在住の中学生が日頃考えたり感銘を受

けたことについて中学生らしい主張を作文として募集し、県下10地域の代表者による兵庫県大会を実施し、優勝者がまた、近畿大会、全国大会へ行くようになっていきます。

5番目の青少年を守り育てる県民スクラム運動は、地域、学校、保護者、業界、行政等が一体となり、青少年の健全育成に対する県民意識の高揚を図るとともに、青少年を取り巻く環境浄化に取り組み、7月と11月が強化月間として重点的に行っています。

6番目のひょうご子ども・若者応援団事業は、各青少年関係団体がキャンプなどの事業を行う時に必要となる物資、例えば飲み物やチョコレートなどを企業と調整し、提供をマッチングをするという事業をしており、昨年度は県下で537件をマッチングしています。

平成22年に兵庫県は人口減少県に突入し、少子化対策は喫緊の課題となったことから、7番目は県から青少年本部の方に委託し、出会いサポートセンターによる会員同士の見合いをお世話しています。

次ページは阪神北青少年本部の自主事業で、賛助会費等で行っている事業です。

①「こころ豊かにのびよう!のぼそう!ひょうごっ子」宝塚フォーラムは平成16年から行っており、1年だけ抜けて今年で8回目です。青少年が夢を持ち、それに向かって努力することや豊かな人間性を身につけることの大切さなどを親子で一緒に考え、また、宝塚歌劇の舞台芸術の感動に触れる機会を提供するためのフォーラムを開催します。1部と2部構成になっており、1部は知事とタカラジェンヌで夢を語るトークを行い、2部は宝塚歌劇、ミュージカル「オーシャンズ 11」を鑑賞することになっています。

次の②「スマイル・フェスタ」は4年目となり、阪神北地域の若者グループを掘り起こし、若者自らが主体となり、企画・運営するイベント「スマイル・フェスタ」の開催を支援することにより若者グループの交流の促進を図り、若者のボランティア活動の活性化を図るという目的で行っています。今年は11月の10、11日の2日間でアステホール6階及びびびいふう広場で行います。①②とも実行委員会形式で、県民局、各地域の団体の方も参加してもらって進めています。

③は阪神北青少年本部長賞、④は広報誌の発行です。

課題としては、自主事業は賛助会費で行っているため、収入が減少しており、広報誌の発行が少なく、枚数も少なくなっている状況です。

川西市の子ども・若者を育成・支援する取組みへのご意見については、お願い等が3点書いてありますが、青少年を健全に育成していくためには、従来にも増して情報化社会の中で、青少年を守り育てる大人の目が必要です。また、地域の日、家族のきずなが必要なため、地域、保護者、学校、行政が一体となって「青少年を守り育てる県民スクラム運動」にご協力いただいているところですが、より一層同運動へのご協力をお願いします。また、7月、11月に重点の強調月間として行うことを記載しています。

次ページのひょうご青少年憲章は、平成12年3月15日に制定し、1～6までの青少年憲章の普及ということも青少年本部では行っています。

【委員長】

「スマイル・フェスタ」は若者が主体になっていますが、どれくらいの参加がありますか。

【阪神北青少年本部】

先程説明した本部事業の青少年交流サロンの20代～30代のメンバーが中心になって、阪神NPOセンターのゆうたまの方にもお世話になっていますが、活動はかなり広がって、今10団体が実行委員会に参加し「スマイル・フェスタ」を企画しています。

【委員長】

交流サロンに来ている20代から30代の人はどうな方達ですか。

【阪神北青少年本部】

大学生や働いている方、今は10人位が中心になって活動しています。

【委員長】

その方達はどのように募集されたのですか。

【阪神北青少年本部】

口コミで広がっていったり、青少年本部のホームページで募集の案内もしています。

【委員】

若者ボランティアの方と接していて、彼らの活動がより充実していくための課題はありますか。

【阪神北青少年本部】

青少年フェスタは、県民局と青少年本部から資金が出るので彼らも楽な面もありますが、自主的に、企業等から資金を集めるとすると大変だと思います。来年度も県民局の予算として要求しています。

青少年本部から、個々の団体に対して一部助成が出ているグループがあり、5団体が、各地域でサマーキャンプなどをボランティアで地域の方と行っていますが、資金面が難しいと思います。

【委員】

その資金面でトレーニングなどを企画されたりしていますか。

【阪神北青少年本部】

現在も「スマイル・フェスタ」の団体について、実行委員会の中で県からの助成内容について、今後はどのように主体的に運営していくか考えてくださいとお願いしていますが、難しい面もあります。

【委員長】

では、次の久代児童センターさん、お願いします。

【久代児童センター】

久代児童センターは、川西市久代3丁目にあり、川西市、宝塚市、伊丹市の境目の所に位置し、老人福祉センターが併設されており、隣には川西南中学校、反対隣は川西南公民館、裏には川西市久代デイサービスセンターがあります。

活動の内容については、アンケートに書かせていただいている通り、久代児童センターは市内に住所

を有する18歳未満の児童、幼児及び保護者を対象とした遊び場で、地域の児童に対するレクリエーションセンターとして児童に健全な遊びを提供し、体力を増進し、情操を豊かにすることを目的とした児童健全育成と子育て支援を行っています。午前中は親子教室や赤ちゃん交流会を行い、午後は幼稚園児対象の教室や小学生対象の教室を色々に行っています。それ以外も自由に来館し、遊べるスペースがあり、乳幼児にはいつでも遊べるプレイルームを開放し、小学生にはおもちゃの貸し出しなどを行い、催しに参加しなくても自由に遊ぶことができます。老人福祉センターの利用者がボランティアで指導を行う世代間交流の教室や、地域のボランティアグループの協力で色々な活動を行っています。

活動の現状について平成23年度の児童センター総利用者数は18,100人ですが、内訳として中高生の利用者数は772人で児童センター総利用者数の5パーセントに満たないです。小学生の利用者は全体の6,201人で全体の約35パーセント、乳幼児の親子の利用が11,127人で全体の約60%を占めています。児童センターの催しのほとんどが小学生と乳幼児の親子を対象としているので、この数字に現れているのかなと思います。

今年度初めて中高生の利用者を対象とした催しを行いました。きっかけは、トライやるウィークに参加した中学生が、乳幼児や保護者と触れ合う体験をして、自分もこのようにかわいがってもらっていたのか、自分の母親もこんな苦勞をしていたのか、赤ちゃんがかわいいから自分も将来生みたいなどの感想がありました。他にも、親が嫌いだったり、また親に嫌われていると思っていた子が、この体験を通じて多くの気づきがあり、命の大切さを感じてくれるので、この体験を少しでも多くの子どもにして欲しいと思って、夏休みに赤ちゃんと中高生のふれあい交流会を行いました。

活動における課題としては、児童センターは開館時間が5時半までなので、中高生の利用者は、試験中などのクラブ活動がない時や夏休み等のクラブ活動がない時間に限られています。乳幼児が遊べるプレイルームや図書室はありますが、学習室や音楽室、飲食スペースなどがいないため、中高生が利用するために適した場所がありません。中高生のほとんどが老人福祉センターの運動指導室で卓球とビリヤードを目的に来館しています。

乳幼児への衛生上の配慮から館内の飲食は禁止していますが、飲食物の持ち込みやごみの放置など注意しても同じことが繰り返されています。注意されたことへの反抗で器物破損や噛んだガムを壁に付けたりするなどの行為が見られるため、指導に困っている状況です。

来年度は夏休みに中高生を対象として、隣の南公民館をお借りして、料理教室やパン作りを地域活動栄養士協議会の協力を得て計画していこうと考えています。

まずは、私達が企画した催しに参加してもらうことから始めて、中高生が何か活動がしたいという声があった時に、どのように私達が協力できるかということが課題だと思います。

また、中高生が活動するのに必要な設備が整った施設ができればいいなと思います。久代児童センターは川西市の南の端にあり、限られた地域の方しか利用がないのが現状なので、たくさんの方が利用できる場所にそのような施設があったらいいなと思います。

【委員長】

中高生が活動しやすい施設のイメージはありますか。

【久代児童センター】

宝塚のフレミラなどの施設は、飲食や、学習、運動ができる場所があります。専門的に中高生だけを見るスタッフがいて、いろいろな企画をしたり関わって、その施設でのルールがあって、中高生が楽しく集まれるスペースがあればいいなと思います。

【委員】

赤ちゃんとのおふれあい交流会を行って、その活動の振り返りをどのように支援していますか。

【久代児童センター】

夏休みに2回行ったのですが、1回ごとに違うメンバーが参加しています。中高生は、夏休みもクラブ活動が忙しく、広報で募集しても応募は1名で、あとは口コミで来てもらいました。アンケートを書いてもらったり、その子達とのつながりは今もありますが、赤ちゃん交流会に参加した振り返りは行っていません。

【委員】

学校などには参加の要望を伝えに行かれたんですか。

【久代児童センター】

このような企画をするので、隣の中学校に参加して欲しいとお願いに行ったのですが、チラシは配ってもらえましたが、夏休みはクラブ活動で忙しいから参加は自主性に任せるということで、それ以上は難しかったです。

【委員長】

次に、川西市商工会より、国津商事さん、お願いします。

【国津商事株式会社】

私は青年会議所やPTA連合会で長い間、子育て活動に従事していました。JCで青少年健全育成活動に、その後、東谷中学校のPTA会長、川西連合会、川西北陵高校のPTA会長をしました。当時は非行が大きな問題になっていた時代で、また、トライやるウィークが兵庫県で導入された1年目で、どのように民間企業で働く場所を提供できるかなどについて検討したり、子どもの人権オンブズパーソンの設立前で非常に議論があって、この制度が導入された時でした。そのような時代でしたが、今のような子どもを取り巻く環境の悲惨な姿はありませんでした。

当時、青少年問題協議会においては、荒れている学校のことや、繁華街で子どもがたむろすることへの教育的な指導や、そのような問題が大きかったです。また、不登校は大きな問題になりつつあり、学校に来られない子どもをどのようにサポートするか大きなテーマで議論していました。今程不登校の子どもは多くありませんでした。最終的には解決策ができたということはありませんでしたが、先生が、毎週家庭訪問をしたりと基本的な活動から始まって、不登校の子どもが集まる居場所づくりでセオ

リアを整備している段階でした。

企業としてよりも、PTAの役員として気付いたことは、子どもの成長に母親は関わりますが、日本では育児に父親が関わらないことが多かったので、父親が子育てに関わる状況をつくるために、例えば父親参観日を企画したりしました。私自身は、自分の子どもの入学式、卒業式、運動会、文化祭へ行ったことがなかったんですが、中学校に子どもが入った時に、恩師にPTA会長に引っ張られて、初めて教育、子育てと関わり、今までは関わってなかったことに気付きました。子どもは親の背中を見て育つんだなと思います。何も関わらないと子どもは懐かないです。

私がPTA会長になっていて、上が中学3年生、下が小学6年生の時に二人とも修学旅行へ行きました。上の息子は決められたお小遣いの中で欲しい物がなかったからお金が余ったと言って帰ってきました。息子は貨幣価値を分かっている、無駄遣いをしないんだなということが分かりました。下の娘はお金が足りなかったと言って帰ってきました。娘は、おじいさん、おばあさん、家族にはこれとそれぞれにおみやげを買おうと自分の物が買えなかったと言うのを聞いて、優しいところもあるんだなと思いました。自分が普段なら気付かなかったことに、PTAに関わったことで気付きました。父親として子育てをしっかりとしないといけないと思っていても、仕事が忙しかったりしてなかなか関わっていなかったんですが、PTAをして子どもの成長を実感できるというのが一番大事でした。

PTAの中で、父親に気付いて欲しいと色々な仕掛けをしていたんですが、仕事等でやはり難しかったです。

当時、川西市内の小中学校の家庭でテレビを1日中つけない日を決めて、どのような気付きがあるかをしたかったんですが、実現できませんでした。家庭でテレビを消してゲームもできないと何もすることがなく、居間に集まり話をするしかないので、全ての保護者に大きな気付きがあり、できたらいいなと思いました。

当時はできなかったのですが、今日この会議では是非言いたいと思っていました。そのようなことを地域として実行したい、子どもは嫌がると思いますが、家庭として気付きがあり、親が子をコントロールできるか、社会運動として年に1回テレビをつけない日として川西のイベントをしたらどうかと思います。

企業としては自動販売機を通じて清涼飲料水を販売する会社で、40人程の社員がおり、各年代に社員がおります。ここ10年は仕事を辞める人が減り、世の中の不景気で転職は厳しいことを感じています。若い社員の方が世の中の厳しさをよく理解して育ってきて、逆に強いのではないかと思います。昭和50年代、高度成長期に入社した世代の方がどちらかというと甘いのではないかと思います。いわゆるバブルの頃、人がいなくて、自分の会社の社員が抜けることを防ぐために甘やかされて入社して働いている社員の方が比較的考え方が甘いような気がします。

企業として、この問題に対してどのようにサポートできるかは、残業時間を減らす、有給をとりやすくするということが言えません。各企業は苦しんでいて、収益の問題もあり、なかなか余剰人員を抱えていないので、限られた人数で業績を上げないといけないことと、このようなテーマで社会貢献とし

て子育てしやすい時間を提供できる会社の体制にしないといけないこととジレンマがあります。ただ、土日は普通は休みですし、そうではない会社も平日が休みになるので子どもと関わることができます。

P T Aを経験して思うのは、社会も学校も大事ですが、やはり、家庭が1番大事です。父親と母親が子どもの人生の半分以上に関わり、その中で決まっていくと思います。ここはもっと地域の中で、仕掛けづくりを上手くして親を引っ張り出して子どもとの関わりをつくるのが大事です。母親は、子どもと関わることが多いのですが、子どもと父親は、表面上の話はありますが、本音でぶつかることはあまりないという気がしています。私もP T Aなどをやらなければ、気付くこともなかったと思いますので気付くことが大事です。

【委員長】

商工会の中で、このようなテーマで企画したり、話すことはありますか。

【国津商事株式会社】

商工会の中ではこのようなテーマを話す部署はありません。会議に出るという役割はあっても、それを活動に繋げることは川西ではありません。

【委員長】

会社の中で、若い社員の方で生活や仕事に生きがいをもって取り組まれていると感じられますか。

【国津商事株式会社】

比較的わが社の社員はやる気がある社員が多いです。将来、責任の重い立場になりたいという意思を示している社員はいます。人生を投げているような社員は少なく、生活感を持ち、一歩でも上がりたいと考えている社員が多いです。

【委員】

御社の社員の方で、新卒の方と既卒で転職された方の違い等がありますか。

【国津商事株式会社】

ほぼ9割が転職です。最初の職場で夢破れて、次を探してめぐり合って入社しています。以前は新卒を定時に採用できるだけの制度はありませんでしたが、これから徐々に新卒を採用していこうと思います。今は知り合いを通じて空きがあれば雇って欲しいという声が多く、そのような人の全てを採用できません。昭和50年代は探しても雇えなかったんですが今は逆です。

【委員】

学校教育に対して何か要望は、経営者の立場または、商工会としてありますか。

【国津商事株式会社】

色々な考え方はあると思いますが、できない子どもを助けて世の中へ送るのも教育の役割だし、できる子どもをもっとできるように、世界で活躍する子を育てるのも教育の役割、両方が大事だと一個人として思います。確かにできない子どもを助けるのも大事ですが、そこに偏りすぎないようにして欲しいと思います。世界の競争の中でグローバル化に打ち勝っていくために、勝ち負けが発生するのは事

実なので、そこを勝ち抜かないと日本の地盤沈下は収まらないです。戦後の反省の下で60年間続いていた教育は、当初はそれが良かったと思います。兵庫方式、総合選抜も昭和50年代には良かったんですが、その弊害も出ており、今はやり方が変わってきたようですが、やはり競い合うことが自らを高める第1歩だということ子どもが感じる必要があると思います。

先生の仕事が多すぎて人が足りないのであれば、もっと教育へ予算を投入するべきだし、日本がもう一度成長するために、教育が大きなウェートを占めています。先生もいろいろな方がいますが、もっと民間から教育者としての立場と共に、民間の活力を教育へ注入できる方式を考えて欲しいと思います。

【委員長】

次はこうベユースネットさん、お願いします。

【こうベユースネット】

我々の法人は、主に私が担当している若者の自立就労支援事業を6か所と、青少年の居場所並びに健全育成を主な事業としており、青少年の施設管理は4か所で運営しています。

厚生労働省兵庫労働局と川西市が一緒に、兵庫労働局の委託事業である、一体的自主事業（川西市）で、本年の7月2日から川西しごとサポートセンターの中の狭いスペースで若者キャリアサポート川西を委託実施事業で行っています。しごとサポートセンターの事業が、以前はパートバンクでしたが、今年度から新たに仕事を探すための検索機が7台入り、そこで新たな取り組みで相談機能をもたらされました。ハローワークのマッチングを中心に、その中で特に若者において相談しながら仕事を探していきましょう、その機能を補完する意味合いで作られました。

今回は7月から始まったので、3か月くらいの事業等について説明します。活動は、概ね40歳までの若年求職者を対象に、内容として合同就職面接会in川西を11月13日にアステ川西で開催します。並びに来年は2月に実施します。事業所を募集し、川西市を中心とした若年者の就職の機会を創出します。並行して直前対策セミナーを同じ回数で開催します。キャリア・コンサルタントによるキャリア形成支援を毎日行っており、時間帯はハローワークと同じ、朝9時から5時まで土、日、祝日は休みです。就職支援セミナーをキャリア・コンサルタントが実施しています。臨床心理士等による心理カウンセリングを週3日、月、水、金に実施し、社会保険労務士による労働条件、生活支援相談を週2日、火、木で行っています。おのおの臨床心理士への相談等は1日4枠の制限があり、これに掛かる費用は相談業務内で行うので無料です。

来られている相談者の中で、様々な難しい状況、障がい者雇用への相談、様々な問題を抱えた若者の問題も多く寄せられています。キャリアサポート川西において、現役高校生が不登校になり、就職したいという相談があり、この場合は、学校に在籍しているので様々な要因で条件が厳しくなるので、関係先と連携した窓口へリファーし取り組んでいます。

現在の活動の状況は、合同就職面接会in川西では、川西市内の事業所が18社、伊丹市内の事業所が2社、合計20社で実施する予定です。

若者キャリアサポート川西の職員体制は常勤のキャリア・コンサルタント1人、全てを段取りするコーディネータの役割をし、もう一人は週3日、臨床心理士週2日、心理カウンセラー週3日、家族相談士がそれぞれ1人、社会保険労務士が1人、合同就職面接会 in 川西の求人開拓員1人で全て職員は女性です。

若者キャリアサポート川西の利用状況ですが、登録制を敷いています。まずは、初回面談で話を伺って、それぞれの方の仕事探しにおける問題、場合によってはそれ以外の問題も発生しています。川西市との当初の話の中で、あまり深い相談対応はここではしない、あくまでも仕事並びに進路に向けた相談がベースです。登録者は74名で、一般的な就職支援窓口より若干女性の方が多いです。私達には川西も含めて6か所の施設がありますが、一般的に男女の比率は反対です。平均年齢はちょうど30歳です。居住地はほとんどの方が川西市から来られています。となりの宝塚市から来られる方が多いのは交通の便の関係だと思えます。

就職決定者、7月2日から10月16日現在で17名です。これには非常に短期の就職、1週間以内の方は含んでいません。概ね6カ月以上でパート、契約社員においてもそうなっています。就職されました方の男女比は、4人と13人です。これは、パートタイムにつかれる方は女性が圧倒的に多いのでこのようになっています。就職されました方の平均年齢は28.5歳です。

相談内容は心理カウンセリング、労働・生活相談等は当初の想定した相談件数より大幅に下回っています。要因はしごとサポートセンターに相談に来られて、このような場所で相談することを思わず躊躇されて帰られる方が珍しくありません。内面的なことを仕事探しの現場で話にくいと思います。すぐ横では、元気な方がハローワークの職員の方とマッチングを行っています。もう少し環境を整えば、より若者が抱えた問題を受容した継続的な相談へ繋げていけると思えますし、それが今後の活動における課題だと思えます。

精神疾患、アスペルガー症候群など実際に障がい者手帳を申請された方の就労相談もあります。川西においては9.5%です。まだ、サンプル数が少ないので言えませんが、私たちが運営している地域サポートセンターではアスペルガー症候群が18.5%の数字が出ています。それから比べると半数ですが、川西しごとサポートセンターの場所の特性からすると、多いと思えます。

今は月、金の午後に川西しごとサポートセンターの隣の相談室をお借りして、心理カウンセリングをしています。なかなかその枠にはまらない時間帯に相談に来られた方に対して、相談スペースがほとんどないので、市の方もとりあえず国の予算でできるから実施しましたが、より効果の検証をしようとするならば、違う場所での相談スペースの確保が望ましいと思います。そうではないと通常のハローワークのマッチングプラス相談の中で対処する形にしかならないのではというのが、この3ヶ月運営した印象です。

【委員長】

若年求職者の方への周知についてはどのようにされていますか。

【こうベユースネット】

市の広報誌を通じて発信しています。広報業務については市民を対象に市の方ですが、それが不足しているのではないかと。私達はハローワークを通じてチラシを関係機関へ出しています。この74人の登録者の中の6割以上が、しごとサポートセンターからの紹介で相談に来られています。一般の市民の方が自ら情報を得られて足を運んでくることはまれです。出来れば、広報誌並びにもう少し広範囲にこの窓口を周知できるような方法をとればと考えています。

【委員長】

求人開拓員の方が企業や商工会に働きかけているのですか。

【こうベユースネット】

商工会さんには大変お世話になり、今回の合同就職説明会のチラシを、商工会の郵便を配布時に同封いただいています。

【委員】

障がいがある方、特別な支援が必要な方は別に考えて、若者が就労しようとする時に足踏みしてしまうのは、何がネックになっていると思われませんか。

【こうベユースネット】

家族との関係です。私達が若年者の自立就労支援に関わって7年余りです。1か月に6か所の窓口で毎月110人新規登録者があります。今までに2回、登録者に対するアンケートを実施しています。アンケートの回答や、私達のところに6年半前に相談に来られて今も相談に来られている方がいますし、私達の相談員はあまり変わっていませんので、そういうところから聞きとっていたり、また、しんどい方はご家族との面談も行い、親から聞き取りをしています。

子どもが思っている仕事に対する思いを親に伝えられない、親の意向を無視できないから期待に応えたいという中で、うまく仕事の継続に繋がらない、自分がやりたい仕事ではなかったと、それが何年かしてポンとはじけて離職して、ひきこもりに近いニートになることもあります。また、一定のパターンがあり、公務員、公認会計士等を目指すと、子どもの学力から難しいと思っても親が自分の子どもだからと容認して、3、4年たって30歳前になってこれはあかんと相談に来たり、親の職業観を押し付けるのは多いです。お母さんは当初から関わりますが、父親はほとんど関わりません。退職されたり、自分の収入が途絶えるとあせりを感じる、そこで父親と子どもの意思の疎通ができなかったり、確執が生じることもあります。そこから極端な話ですが、親は腹に思っても言わない、私達に代弁して欲しいというひどい親もいます。または、子どもの気持ちを聞いて欲しいという親は珍しくありません。

私達の団体で、キャリア・コンサルタント、臨床心理士、心理カウンセラー、専門職合わせて15人が定期的に、半日位かけて事例を持ち寄って話し合いをしますが、年々症状は違いますが、状態は良くない、ひどくなっています。

【委員】

いわゆる「良い子」の方がありそうなことですか。

【こうベユースネット】

そうです。それと、いじめから不登校で、ひきこもりになる子です。やんちゃな子はいないです。

【委員長】

では最後になりましたが、県立猪名川高等学校さん、お願いします。

【猪名川高等学校】

本校は平成23年度より、文部科学省研究開発学校の指定を受けて、兵庫県教育委員会とともに行っております社会人基礎力育成プログラム開発事業の一環で道德の時間を高等学校の中に入れて研究をしております。私が今まとめ役をしており、その紹介をいたします。

猪名川高校は1学年4クラス、3学年で12クラスの比較的小規模の学校です。様々な取り組みをしており、交流活動ではオーストラリアのマウントクリア校と姉妹校提携をしていたり、福祉交流で川西養護学校、伊丹のこやの里特別支援学校と交流を図っています。

生徒の特徴ですが、全般的に学力は高い方ではなく、人懐っこく素直な生徒が多いのですが、一方で何か問題に直面した時にその場に応じた適切な言動が取りにくかったり、自尊感情が低く、自分自身に自信が持てない生徒が見受けられます。

私は今、学年の主任をしている立場もあり、自分の学年の生徒にはもっと人としての生き方を根本的に考えるような時間、活動を何か仕掛けとして作りたい、という問題提起からこの道德での指定となりました。そもそも高校では授業としては道德の時間はありません。少し理屈っぽい話ですが、高校の学習指導要領には、人間としての在り方、生き方に対して学校の教育活動の全体として行うことは書かれていますが、教育内容については具体的に示されていません。これが大きな問題であり、小中学校のように道德の時間はありません。文部科学省の研究開発学校の指定を受けたこともあり、高校で道德の時間を週に1時間設けることができます。

実際に道德の時間に何をするかということですが、基本的な型があり、読み物資料を活用して、道德的な問題に焦点をあててその登場人物の心の変化を追うという事を行っています。1例を挙げると、「1冊のノート」という読み物資料があります。主人公は、家族のおばあちゃんが認知症で頼まれた買い物を買ってくることを忘れて、家にいるような服装で裸足で出歩いています。そのような姿に主人公はとても苛立ちを覚えて、恥ずかしい、腹立だしさを感じているんですが、ある時、部屋でたまたま見つけた1冊のノート、おばあちゃんが書いたノートに、おばあちゃんが物忘れが激しくなっていくことや、子どもの成長を喜ぶ胸の内が書かれており、だんだんと字がぼやけていって、最後にはペンのインクがポタッと落ちているのを主人公は見てしまいます。それによって、おばあちゃんの庭いじりをしている隣で、一緒に庭いじりをするというストーリーです。その時に授業の中の発問として、そういう時に主人公はおばあちゃんの隣で何を感じたんだろう、考えたんだろう、何を考えてその苛立ちから隣に寄り添うようになったんだろう、というような行動の背景にある心の変化を授業で問います。

このような授業の基本形を小中学校でもしていましたが、高校でも引き続き行い、いわゆる人間としての在り方、生き方を授業で考える時間を持っています。生徒の反応ですが、小中学校でも実際にしていましたが、実態としては、いわゆる先生側の価値観の押し付け、何か教え込むような授業が現状としてあったり、一般論的な考え方の紹介で留まっていることもあるようですが、私達がしようとしていることは、私達は教えない、生徒に何かを考えてもらう、気付いてもらう、対話型の授業を目指しています。先生は教えたがりますが、授業の最後で、だから思いやりは大事だよね等のまとめはしません。オープンエンドで締めくくります。そうすると生徒自身は、今まで主人公の心の変化を追っていたのが、アンケートに書いていることは自分自身の家族を振り返る結果になった、今までの自分を振り返って、もっとおばあちゃんに優しくしたいと思うようになった、など、また授業の感想としていろんな人の意見が聞けて良かった、もっと自分の意見が言えたらいい、など自分自身がもっと授業に関わりたいという前向きな気持ちが出てきました。

そういう生徒の反応があり、劇的な生徒の行動の変化は、正直な所、道德の授業をしたから生徒がこう変わったということはありませんが、日常生活の中で、例えば道德の授業をした翌日のホームルーム活動がしっとりとした雰囲気が進められる、教師と生徒のコミュニケーションが良くなった、生徒から先生に話しかけるようになったという先生側の印象も聞かれます。

生徒の内面的な変化は授業ごとのアンケートで聞きつつ、日常の指導場面でのちょっとした変化で感じられますが、このような取り組みをしていることから、猪名川町の小、中学校と連携をとって縦の繋がりを図ろうということもしています。読み物資料を使った研修会をしたり、小中学校の生徒がどのような状況なのか聞きつつ、私達も高校生の状況を伝える機会を数回持ちました。

あと一つ紹介をしたいのは、いわゆる道德教育の要となる道德の時間を実験的に設定していますが、その学校の授業と体験活動を関連付けたい、ということを考えています。

本校は1年生入学時の4月にオリエンテーション合宿をします。これは、ほとんどの高等学校でしていますが、入学後の学校生活に順応できるように、1泊2日の生徒同士、先生と交流する活動をしています。本校ではグループワークを通じて高校3年間でどんなことを学びたいかを個人で考え、それをグループで他の子と意見交換し、模造紙でまとめて発表しています。もちろん、成績アップを図りたい、たくさん友達をつくりたい、部活でがんばりたいという声もたくさんありますが、おもしろいのは、善悪の判断ができるようになりたい、人の心の痛みがわかるようになりたいというような意見も毎年聞かれ我慢強くなりたいたいなどの意見もありました。

1年生の最初にそのような活動をし、2年生はインターンシップ就業体験、今年が2年目ですが、昨年は2年生の3分の2程度が、今年は2年生全員がどこかの事業所に行き就業体験を実施しました。

これで道德の授業をしつつ体験活動も入れつつその関連を図ることに、今、取り組んでいます。

そして、まだ実施はしていませんが、今後の展望として、1年生でお年寄りに聞くという体験活動を考えています。地域の年配者、高齢者に昔の地域の様子、遊び、その方の生きざま、そのような様々な

お話を聞いて、まとめて発表する活動も入れていきたいと考えています。

【委員長】

インターンシップを道德の時間から始めて、インターンシップの体験を道德の時間の中でさらに理論付けしていくということでしょうか。

【猪名川高等学校】

道德の内容項目の中に勤労観があります。働く事の意義について考え学ぶのですが、この道德の授業で勤労観について考え、そしてインターンシップをして、その後また、道德の時間の中で勤労観をテーマにした授業をしています。

今年の試みとして2年生はグループワークをして、インターンシップで体験した活動を振り返り、シェアリングをしてまとめて発表する取組をしています。

【委員】

キャリア教育で行うインターンシップと道德教育で行うインターンシップの違いについて、具体的に掘り下げて聞かせていただけますか。

【猪名川高等学校】

道德の中にキャリア教育があるという位置づけで考えています。そもそもインターンシップは道德とは違う授業ですが、人としての在り方、生き方を考える中で、高校生の場合は、卒業後の進路のことが現実問題として絡んでくるので、進路学習が間に入って就業体験に結び付けるというイメージを持っています。

【委員】

研究開発校に指定されて、学校外の有識者、大学や地域の方、NPOの方との共同研究、協働実践などの形はとられていますか。

【猪名川高等学校】

大学の先生にアドバイザーという形で来ていただいて、指導助言をいただいています。

【委員長】

皆様から一通り、お話を伺いました。ありがとうございました。

お互いにお話を聞いた中で、聞きたいことがあればやりとりをしていただきたいと思いますのですが、いかがですか。

国津商事さんは、お話を聞いて何か感じられたことはありますか。

【国津商事株式会社】

親と子の就職に対するギャップ、表と本音がかかなりかけ離れている、親の期待に押しつぶされるような形かなと、職業観を子どもに押し付けているところが私にもあるかなと思いました。

【委員長】

就労支援にあたって、本人の立場で見えていくことが大事ですね。

【国津商事株式会社】

うちの社にもやめた子がいました。非常に厳しいお母さんに育てられて、お母さんの言う通りに育ってきて、非常に委縮している子が紹介でバイトで来て、正社員になりたいということで採用したんですが、4、5年でやめてしまいました。非常に不安定でした。お父さん、お母さんには良い子だったのかもしれませんが、社会に適応する能力が低く、怒られると我を忘れたようなふるまいを社内でもして、他の従業員との軋轢があり、最終的には本人が居づらくなってやめました。

親にとってストレスのない子どもは、親のいう事を全て「はいはい」と言って、子どもの方はストレスを受けながらも親に良い子になってしまう傾向があるのかなど。親に反抗してうっとおしい子の方がたくましく生きていける、親は抵抗しない子をかawaiiがるというのは間違っていますよ、反抗しない子の方が危険だということを社会として提供しないといけないとPTAの時から思っていました。

お母さんは自分の子どもを、よく親の言う事を聞く時に褒めます。先生にうちの子は親に反抗的で向かってくると相談されますが、それは正常だと思います。暴力をふるったりするのと紙一重の所もありますが、成長の度合いがあって、親に対して社会に対して反抗することで自立心に繋がっていると分かって子育てしないと。何でもいう事を聞く子が正常というのは、間違っているというのを社会として示した方がいいと思います。

【委員】

難しいですね。折り合いの付け方は一人一人、かなり違った見せ方をするので、親の言うことに反発することで自我を出す子もいれば、聞き流すことで自我を守る子もいます。反発しないからあかん、反発した方がいい、というのはなかなか言いにくいと思います。

しかし、何よりも大事なことは、親がどうかというよりは、誰かが聞いてくれる、本音を言える相手がどこかにいればいいと思います。親である必要はなく、どこかにそのような人がいれば自分を作っていけると思います。

それ位ははっきり言った方が伝わりやすい反面、言い方を間違えると難しいですよ、メッセージが伝わりにくいところをどう考えるべきか、難しいです。

【委員】

今日の話を知って、中学校とどのように連携していくのかというのが、ポイントかなと思います。高校との連携では、阪神NPOセンターさんは市立伊丹高校と連携していたり、猪名川高校では、大学の先生が入っていたり、比較的、外に出ていくことも多いと思いますが。中学校をどのように巻き込んでいくのか、連続性が切れてしまうので、北陵コミュニティさんも中学校はクラブがあったりということや、久代児童センターさんもクラブがあるのでなかなか来てもらえないと言われていました。ここで切れてしまうので、高校でまた戻ってくれたらいいのですが、3年間は長い時期で、発達段階においても色々な時期があり、大きな課題だと思います。

それでも何か中学校と連携しているというのがあれば教えて欲しいんですが。

【阪神NPOセンター】

市立伊丹高校と連携している訳ではなく、先生との個人的な関係があり、互いにできることをやっ
ていこうとしています。中学生もゆうたまに何人か来ていますが、学校と公共施設という観点から捉える
と前に進まないの、いかに個人のレベルで来てもらえるような仕掛けをしていくのかがこれからの大
事なポイントだと思っています。我々は健全育成を目的にしている訳ではなく、まちづくりを多世代で
支える、迫力あるまちづくりしたいという思いがあるので、そこは学校ともうまくいく場面もあればい
かないこともあると思います。

【委員】

現状の中学校を考えるとなかなか外に出て行く状況ではないし、学校単位では難しいのかなと思いま
す。個人のつながりで来ているというロコミでまた友達が来ているような活動で限界なのかもしれませ
んが、中学生が来ているということがあれば教えて欲しいんですが。

【北陵コミュニティ】

中学校は、2年生でトライやるウィークが実施されていますが、兵庫県のやり方は基本的に地域の方
にお世話になるというコンセプトがあり非常に良いことだと思います。

その街に我々のような事業所だけに来ているのではなく、公共施設や幼稚園などにお世話になったり
しますが、1週間だけですが、彼らが学びとる部分は非常に大きなものだと思います。2年生だけでは
なくもっと広めていくということも一つの方法ではないかと思います。

先程の高校のインターンシップの体験はとても良い体験をすると思いますし、地域とのかかわりも現
状はありますが、もう少し太いパイプができないかと思います。子どもにとっても、地域の方々にとっ
ても、地域の中学生を理解する良い機会ではないかと思います。

【委員長】

高校のインターンシップはあまり普及していないのでしょうか。

【猪名川高等学校】

総合学科の高校は割に盛んに行っていますが、本校のような普通科の高校は聞かないです。そもそも
事業所と学校との打ち合わせとか調整が本当に大変なので、1教諭が50事業所位と本来の公務に加えて
連絡を取っていましたが、今年はそれでは回らないので、県からインターンシップコーディネーターを
加配でいただいて、その方をお願いしています。

【北陵コミュニティ】

中学校でも事業所に頼んでいくというスタイルです。地域の学校という役割からすると逆で、地域の
方から何人来て、ということになればいいんですが、なかなか実現しないです。

【国津商事株式会社】

仕事の内容にもよります。うちの社は営業系の仕事なので車で外に出てしまいます。体験といっても
難しいです。お世話したくてもできないです。子どもなので安全の問題に配慮しないといけません。

確かに事業所数が減って大変かなと思います。

【委員長】

大変なのは受け入れる事業所の数が少ないので、広い地域から受け入れなくてはならない。交通費を負担するとその補助金が大変だったりします。私の所も受け入れるんですが、本社が神戸にあるので行くために交通費がかかります。

しかし、体験学習やトライやるはいいことだと思います。子どもが中学生、高校生になっていく中でコミュニケーション能力が発達していく中で、そのようなチャンスがあるというのは随分違うと思います。

他に、行政に対する要望などはありますか。例えば色々な活動をされて周知したいと思われた時に、市の広報誌に載せることの他に、もっと広い範囲で考えられると思います。今回、この計画の中で行政のネットワークのイメージがあります。そのような中で周知、告知、広報をもっと広く図れると思います。お互いの中で、ネットワークの中で告知し合うこともできますね。

【阪神NPOセンター】

阪神北の中間支援のNPOが定期的集まって、去年は月例で行っていましたが、北県民局の方は来られますが、市の職員の方は来ません、呼んでないからかもしれません。自分達の仕事ではないと見えています。広域エリアの問題ですが、そういう所に個人でも来てくれたらと思いますね。

【委員】

広報の話は市報もありますが、月に1回の広報より、毎日出る新聞があるので、メディアにも関わってくれたらと思います。ソースを得る機会が必要だと思います。

【委員】

こうベユースネットさんの大体6割がしごとサポートセンターからの紹介ということですが、市の広報はどうなんでしょうか。

【こうベユースネット】

ほとんど効果がないです。市の広報の記事の出し方が良くないと思います。囲みでも誰のために何のサービスを提供するかということをはっきり打ち出さないと、つらつらと作文的なことを書いても、読んでもぼやけます。

三田市と川西市では人口規模も違いますが、我々の三田市の取組は、全戸回覧を行います。非常に効果的です。全戸回覧を年2回、3年続けていますが、非常に効果が顕著に表れています。11万4千人に対して、カラー両面刷りのチラシを5千枚、担当部署に渡して、担当部署は広報と話をして書いていきます。我々の対象者は直接の当事者ではなくても、家族や保護者経由で入ってきます。回覧板は保存しますので、2年前のチラシのコピーで問い合わせをされる方もいます。先程も話がありましたが、一番は新聞だと思います。非常に効果があります。

今回、我々が取り組んでいるのは川西市の事業ですが川西市は腰が引けています。部署は商工農林労

政課で、前線で委託を受けているのは我々ですが、地域における認知度を高めるという意味で、市民のための事業として捉えるのであれば、全ての子ども・若者の健やかな成長と自立に向けた支援の中で我々の事業を捉えているのであれば、そのような意識がないと、我々が来年この事業に手を上げるかどうかは不透明です。

【委員長】

こうベユースネットさんは、前回も今回も来ていただき、期待されていますよね。

【こうベユースネット】

我々NPOはNPOとしての思いを形にしたいから、こういうことをしています。行政から期待されているから、委託を受けたから身を削っているのではなく、思いを形にするために身を削っています。行政と一緒に汗をかこうというのであれば、喜んで向き合います。市民のためにとという形を整えていたいただきたいと思います。

【委員長】

これで終了したいと思います。最後に事務局の方から連絡事項があります。

【事務局】

本日は、長時間にわたり、貴重なご意見をありがとうございました。我々、行政にいる者には分からない色々な世界のことを聞かせていただきました。この議論を、川西市の子ども・若者をいかに逞しく育成できるか、計画に取り入れていきたいと思います。また、本年度中に計画の策定をする予定ですので、その状況を皆様に適宜お知らせしたいと思いますので、その時にまた我々にご意見をいただければと思います。

今日は若者を支援する各分野におけるつながりを、今日のご縁を我々としても大切にしたいと思います。

以上を持ちまして、第4回川西市青少年問題協議会専門委員会意見交換会を終了とさせていただきます。ありがとうございました。